

テキスタイルデザインにおける発想の手がかり

——創作糸による教授法——

松本 美保子*

Clue to How to Make Textile Design

——Teaching Methods of Creative Yarn——

Mihoko Matsumoto

要 旨 本学で織物授業をする際、学生が自分のイメージをどのように作品のなかに表現すればよいのか戸惑う場合をよく見かける。そのため織物の技術面ばかりに目を向け、自分の中にあるイメージを的確に表現することができぬまま仕上げ、結果、創作への理解力に欠けた作品ができあがる。筆者はこの点に問題を感じ、学生の創造力が織物制作のなかにどの様に織り込めるか。学生が「自分で感じたイメージを無理なく表現する」その手がかりを見つけ、これをクリエイティブな仕事に役立てるばかりでなく、あらゆる生活の基盤として役立つような教授法とはどのようなものかを考えた。

今回考察した教授法は、素材自由な糸を作らせ、創作した糸のイメージにあり背景を自由に作り、創作糸がより一層効果を引き出せるよう指導するものである。さらにできあがった糸を学生全体で見比べ、批評しあい、自分の気付かなかったところを吸収し、理解度を深めさせる。この結果、イメージを表現することに徐々にではあるが慣れてきたが、その深さは果てし無いということを理解したようである。この糸作りによる教授法を段階的に記してみたい。

I はじめに

現在、本学の織物教育は、生活のなかの工芸織物として行なわれている。ここでは、織物でつくられる作品に対してどのような素材と色彩、技法が適当であるかを選択、指導している。そのため、どちらかという工芸織物の必然として技術教育を優先した授業体制がとられている。

しかし織物に限らず、造形作品は個人の想像力と創造性なくしては成立するものではない。いわば個人の感情移入によって、作品はできあがるものである。

このような観点から授業を行う場合、現代学生の持つ想像力をいかに引き出し、表現させる

か、適当な指導はないものかを模索した。

そのような折り、テキスタイルの展示会などで糸や布地の説明のなかに、絵や写真を組み合わせたイメージマップを見かけた。それは一目で季節感を適切に表現したもので、言葉の説明は不必要であった。このようなイメージマップを応用し創作糸を授業のなかに取り入れてはどうかと考えてみた。

織物ではその素材に糸を使用する。通常、糸は織るために必要なものであるが、この糸を素材を定めず自由に作らせ、できあがった創作糸をもとに各自のイメージで画面構成を行い、糸が織物を織るだけでなくいろいろな場面に応用できることを認識させた。

その結果、授業中でのディスカッションにより、学生がお互いの長所、短所を認め合い、各自のイメージによる作品の違いに驚嘆の目を向けたようである。このような糸による「イメー

* 本学助教 織物

ジ制作」は織物作品が技術だけではないということを多少なりとも分からせることに効果があったと思う。この創作系による授業内容を記してみる。

II テキスタイルデザインについて

• その語義

テキスタイル (textile) はラテン語の動詞 *texere* (to weave) の過去分詞形容詞の *textilis* (woven) に由来し、名詞では織物、織物材料、形容詞では織られた、織るに由来する語で、狭義の意味の織物、広義では繊維およびその製品となる¹⁾。

デザイン (design) もラテン語の *designum* に由来し物事を創造する営みを指す²⁾。

• テキスタイルデザインの意味

この二者が結合されてテキスタイルデザインとなると、広義の意味ではテキスタイル (繊維、糸、布など) を素材として、この目的にあった造形活動をするための企画設計と考えられている。これらから造られる製品は、プロダクト製品をはじめ、プリントなどがあるが、また一方、タピストリーやカーペット、緞帳など個人の主観的要素の強い一品制作もテキスタイルデザインと定義づけられる。

しかしこれはその時代、その環境や状況によって受けとり方もさまざまで、その理解の幅もいろいろである。

日本でテキスタイルという言葉を使うようになったのは明治の終わりから大正の初めのように、当時発行の染色辞典にはテキスタイル (textile) 「おりもの」(織物) と記されている³⁾。

しかし一般的にはテキスタイルデザインは、糸を織ったり、編んだりすること。あるいは、布地に染色や仕上げ加工を施して、テクスチュア、パターン、色彩を表現することの範囲で用いられている場合が多く、ウィーヴィングデザインとプリントデザインの二つに大別されている。欧米では、この二つは早くからそれぞれ別

の分野として専門的なデザイン教育が行われている。

ウィーヴィングデザインは織物設計に関する原料調合、原糸製造、編織組織と加工技術に深く関連している。パターンは織機や編機の機能、性能に制約される面が多い。

プリントデザインはブロックプリンティング、シルクスクリーンプリンティング、ローラープリンティングなど、その印捺技術と製型、製版技術によって、また使用生地と染料、顔料の特性がデザイン表現を制約し、効果を決定している⁴⁾。

• テキスタイルデザインの歴史

テキスタイルデザインの歴史は繊維、糸、布の歴史であり、きわめて古い。推定ではあるが織物のおこりが現在では新石器時代頃であろうとされているためそれ以前ということになる。また、天然繊維のための湿度や耐久性などの面から、保存されている資料が非常に乏しく、推察の域を出ない。これら乏しい資料のなかでもっとも古い織物の例はエジプト、ファイユム遺跡出土の亜麻布でBC4440年と推定されている。また、西アジア地方でもほぼ同じ頃に土製紡錘車などによってその可能性が推測される。

わが国でも、繊維を用いた技術は、かなり古くからあったと考えられている。しかし多湿な気候風上のため資料はさらに少ないが弥生時代中期には佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡から平織組織の大麻布が出土している⁵⁾。また、われわれが現存する資料として接することができるものに法隆寺、正倉院の飛鳥・天平の染織品がある。

その後、わが国独特のデザイン、染織技術が育ち着物文化を作りだした。明治以後、急速な近代工業化が進められ大量生産され、品質や性能も多様にデザインされるようになり、現在では世界的にトップレベルにある。

• テキスタイルデザインの特性

テキスタイルの性能は繊維、糸、布などの種類によってさまざまな変化を表す。そのためテキスタイルのデザインを行うには繊維素材、

糸、布の種類、加工法なども理解する必要がある。その理由としては、デザインにおける形態・色彩・材質感等の造形はテキスタイルの性能により具体化するからである⁶⁾。

Ⅲ 創作糸について

織物の素材には「糸」を使う場合が多い。この織物に適した素材には天然繊維（麻、絹、綿、羊毛）をはじめ、化学繊維、また天然繊維との混紡など繊維の種類は非常に多く、さらに後加工による繊維の性状も日々進歩している。

なかでも化学繊維の改質、改良など、新繊維の開発に伴うテキスタイル原料の機能は一段と拡大して、繊維製品は医療やインテリア用に用いられるだけでなく、産業用資材としてもその適用範囲は広がっている。

布地制作は一般に、その目的に応じて組織、風合い、色彩、後加工などを考慮して糸を選ぶ。それは用いた糸（繊維）により、布の持つ表情に微妙な変化が起こるからである。

このように使われる糸はその種類の分け方も複雑であるが、以下のように分類することができる⁷⁾。

• 糸の分類

1) テキスタイル原料による分類（表-1）

天然繊維（綿 麻 毛 絹）

化学繊維（再生 半合成 合成）

2) 繊維の長さによる分類（表-2）

スパン糸

フィラメント糸

3) 糸の本数、撚り数による分類（表-3）

普通単糸 普通撚り糸

意匠糸 加工糸

4) 仕上加工による分類

ガス焼 糸染め

5) 糸の用途による分類（表-4）

織物用 ニット用 縫糸用 ミシン糸

その他

1)～5) の分類がお互いに絡み合い糸は作られている。

• 最近の社会状況と繊維

目まぐるしく展開する現代社会は生活や人生に「ゆとり」と「豊かさ」が求められる時代である。繊維製品にあっても消費者のニーズは快適で健康的な商品、さらにファッション性の高い感性商品に関心が高まっている。消臭繊維、抗菌・防臭繊維、さらに芳香繊維など、以前に

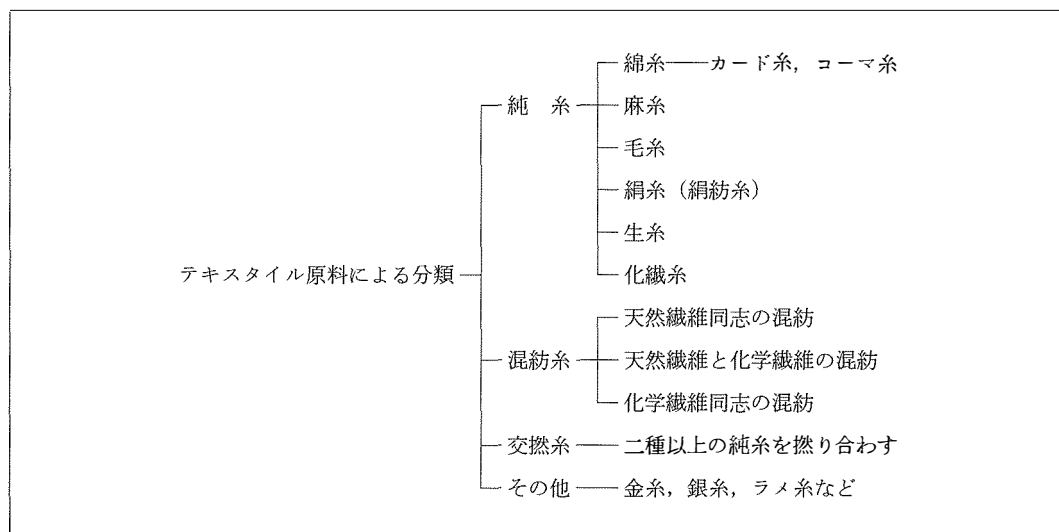
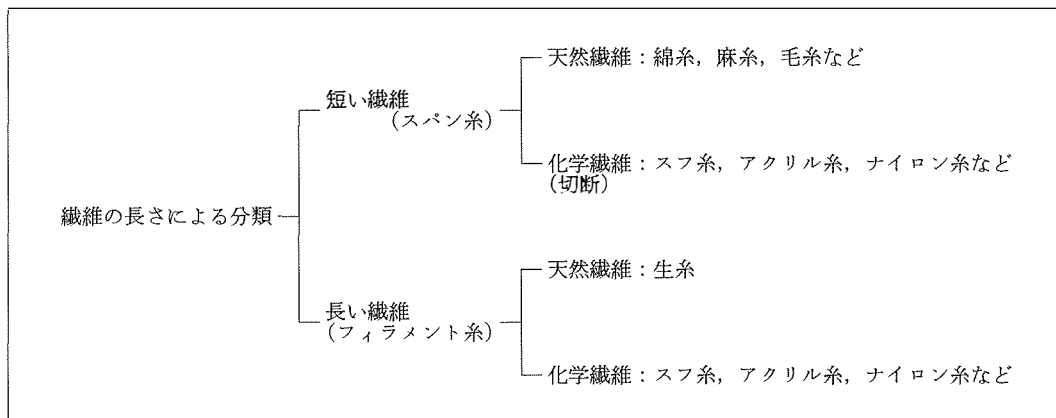
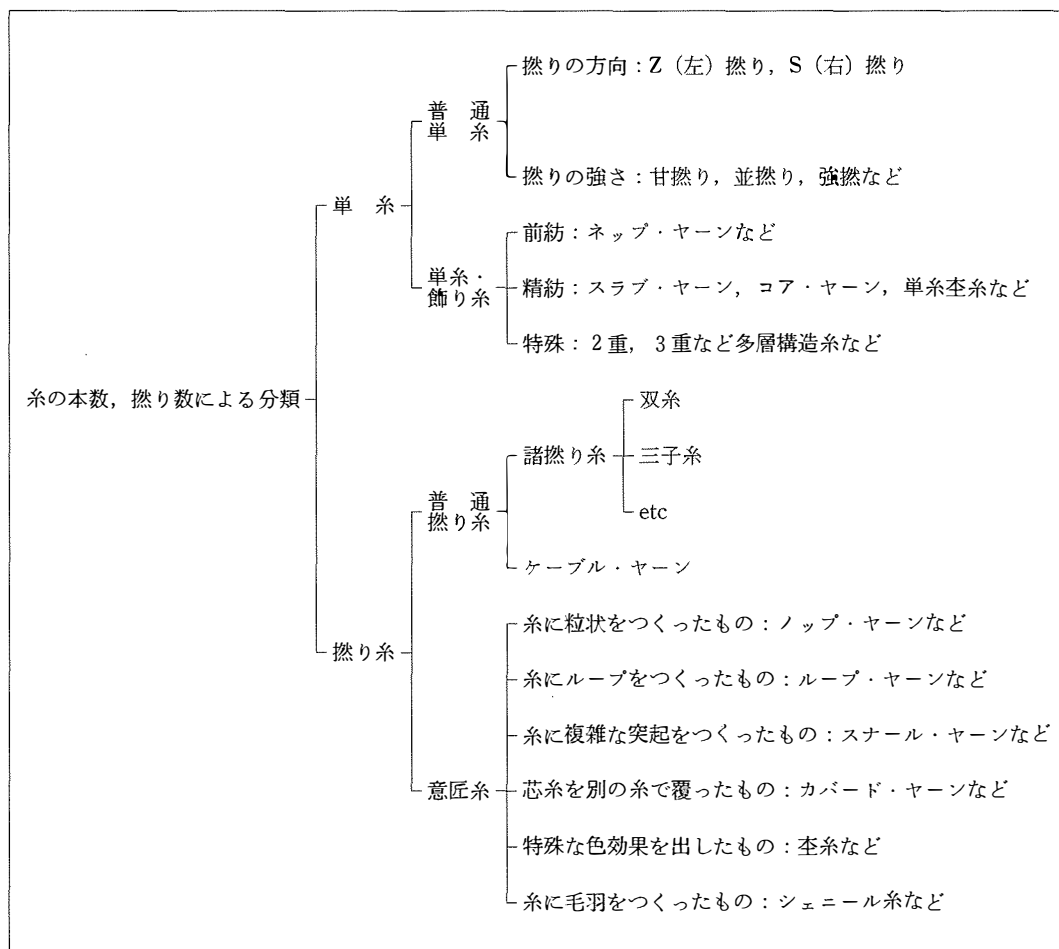


表-1



表—2



表—3

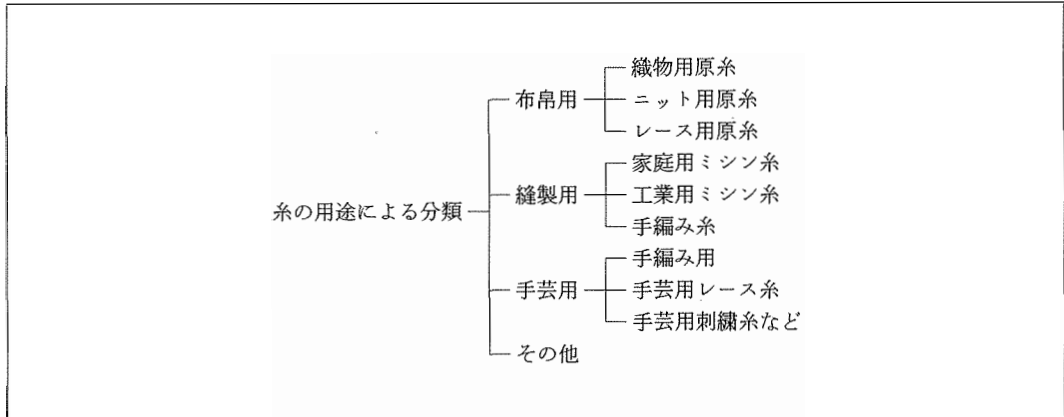


表-4

は考えられなかった繊維も登場した。

• 創作糸への試み

このように繊維を織りだす「糸」というテキスタイル素材も現代という時代を捉えながら、生み出さなければならぬ。そのため、織物の授業のなかで、元来、選ぶことはあっても、自ら作るものなかつた「糸」についての課題を与えた。このなかで「糸とは何か?」にはじまり、「自分で作る糸=創作糸」と発展させ、作られた糸に意味をもたせるなど、多角的見地にたった糸作りを試みた。

くった順序に並べて提出する。台紙の形、種類、色、レイアウトは自由。ただし、他人との相談は禁ずる。

IV 教授法

• 教授法意図

自分の感じたイメージを的確に表現するためには、授業のなかで、何を教授するべきか。とくに織物という手作業を通しての授業には、このイメージは容易に表現できるかも知れないと考え、「創作糸」を創る授業を行い、学生がイメージをどこまで表現できるかを、実験的に行った。以下、演習として行った授業方法とその考察点を記してみる。

演習

課題1
材料自由な20種類以上の糸をつくり、つ

この課題「材質自由な糸」は、一般の常識的糸の概念を捨て去ることから始めなければならない。また20種類もの糸となるため、各々のイメージに合う材質には何が適当かをいろいろな角度から考え、素材を探す作業も時間を要する。しかし、こうしたデータ分析、資料收拾により事物への関心が広まり、初歩的デザインの訓練にもなる。

学生は他人と相談しないことにより、個々の個性を十分に発揮できる機会を持つこともできる。

• 課題発表

課題の発表は学生が全員、作品を囲んで輪になって行う。一人ずつ行うが、その場合、他の学生の作品は伏せておく。

発表は、創られた糸の説明を各々が行う。自分のイメージにあった材料の調達、20種類もの糸であるから、どこでアイデアがいき詰まったか、自分の意図がどこまで伝えられたかなどを、学生同志の質問を交え行う。

こうしたディスカッションにより、学生たちは、お互いの長所や欠点を見だし、そのため自身の物の見方、考え方を客観的に捉えること

課題1の作品

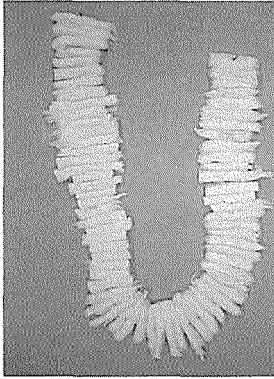


図-A ティッシュペーパーを巻いたもの

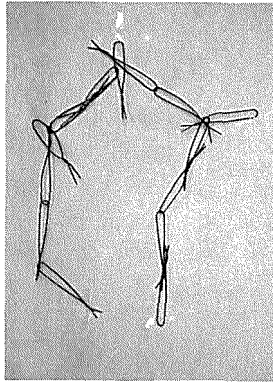


図-B ヘアピン

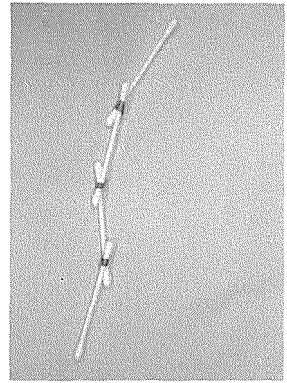


図-C 綿棒

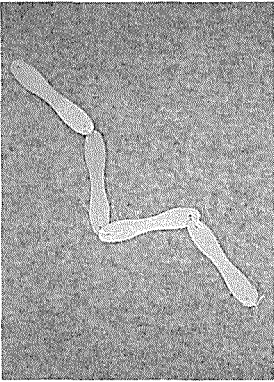


図-D 使い捨て木製スプーン

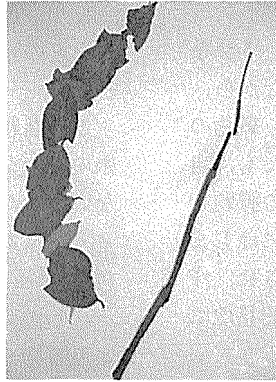


図-E 落ち葉, 木の枝

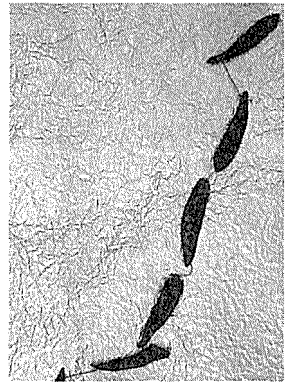


図-F 唐辛子

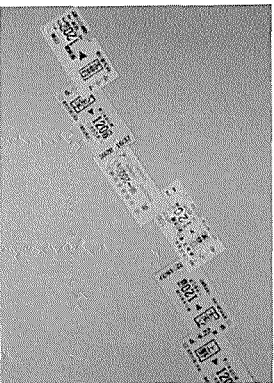


図-G 切符

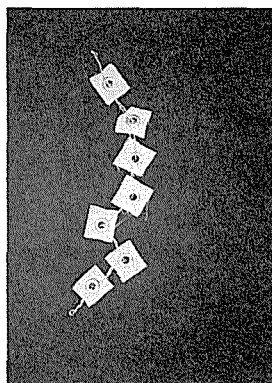


図-H 布地にはどめが打たれたものをつないでいる

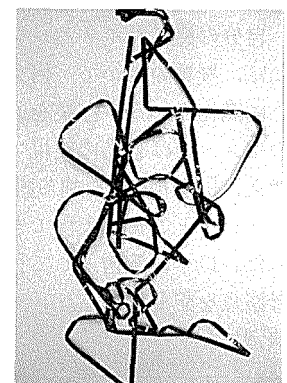


図-I カセットテープ

ができるのである。

素材に対しても、その受けとり方、用い方、素材+素材のバリエーションの広さなどは個人によりさまざまで、同一の素材を扱った場合でも、同じものは一つもなく、考え方の違いがあきらかであった。そのため創られた糸の効果も必然的に変わってくる。(図-A~I)

課題2

発表した20種類の糸を効果的にレイアウトしたイメージマップを制作せよ。画面の紙質、色、大きさ、型など全て自由。また既成の写真、ポスターなども使用してよい。作品はファイルなどに自由にまとめて提出すること。

この課題では、糸を創るだけではなく、糸のイメージで画面を構成し、同時に素材と色の関係を学習するものである。

使う紙質、色、大きさはすべて自由であるが、創られた糸が最も効果的に見えることが望ましい。説明にはミューズコットン、ラシャ紙など、カラーバリエーションのある紙や素材の異なる布など10数枚用意して、創作糸と紙、色の関係を充分理解させる。また写真やポスターのレイアウト、イメージについても講義する。

•課題発表

課題1と同様に全員が作品を囲み輪になって行う。

発表は20種類のイメージマップを説明し、工夫したところや苦心した点などを述べる。

この発表は課題1の発表と同様、最後に全員でディスカッションし、お互いのイメージマップの良否を認め合う。

提出されたファイルは色、形、サイズともさまざまであったが、手作りのファイルやラッピングされたものもあった。なかでも注目されたのはラッピングされたファイルで、並べた時点で興味の対象となった。

学生は課題1の創作糸の感想では「上手い」「下手」といった判断基準で見ている者が多かったが、今回はどの様に表現したいのかという点を重要視したようである。

イメージ表現にはファッション雑誌など種々の雑誌やカタログを一人平均7~8冊利用し、使用したページのどの部分が効果的であったかを考えるなど、工夫が見られた。

20種類もの制作であるため、前回よりも素材に対する扱い方にも慣れ、物の見方、考え方もおのずから変わったように感じられた。

次のページの図版は学生のイメージマップの作例である。多くの作例のなかから主なもの17

	創作糸素材	表現方法	図版番号
1	一般的な素材	同フォルム表現	1, 2
		その他	3
2	素材として意外性のあるもの	イメージ効果表現	4~10
3	同種素材	2枚一組対比表現	11~15
4	同素材のもの	比較表現	16, 17

表-7

1. 一般的な素材（図-1～3）素材をそのままの状態です複数用いる。台紙においても、同じフォルムの写真などを用いて効果を高めている。

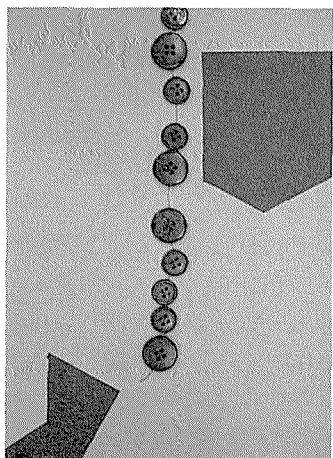


図-1 ボタン

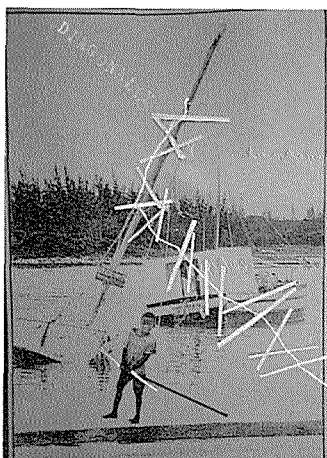


図-2 木片

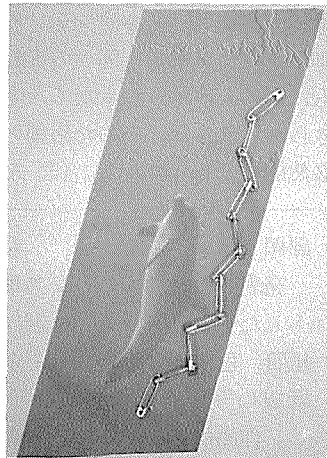


図-3 安全ピン

2. 素材として意外性のあるもの（図-4～10）意外性のある素材を糸として用い、台紙のイメージをより効果的に表現している。

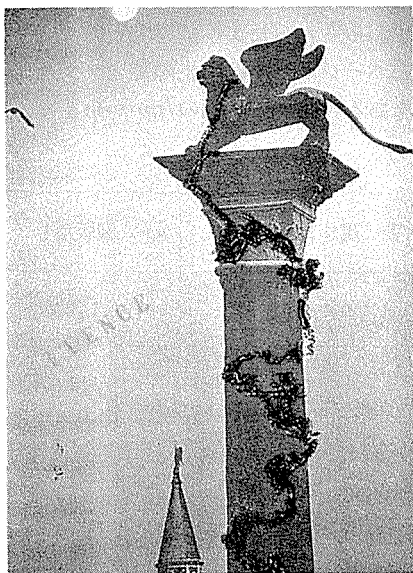


図-4 ステンレス製たわし

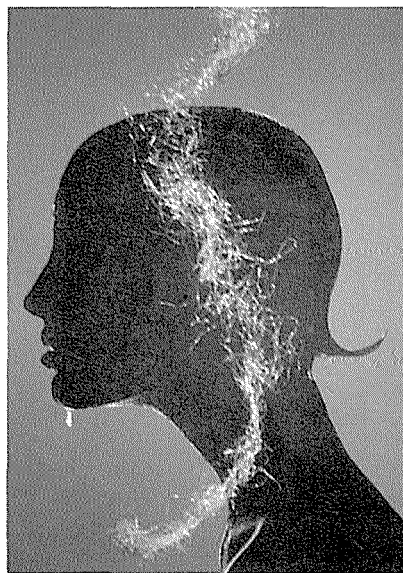


図-5 果物贈答用梱包材

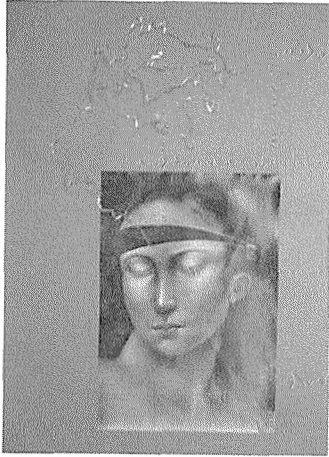


図-6 ホチキス用マックス
針

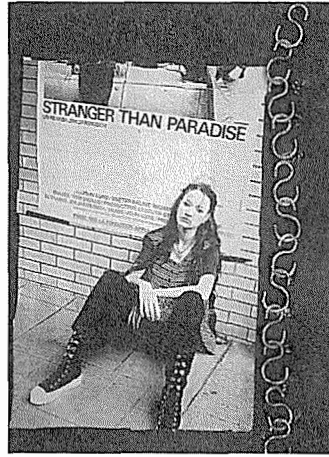


図-7 ステンレス製S字ヒ
ートン+フォック

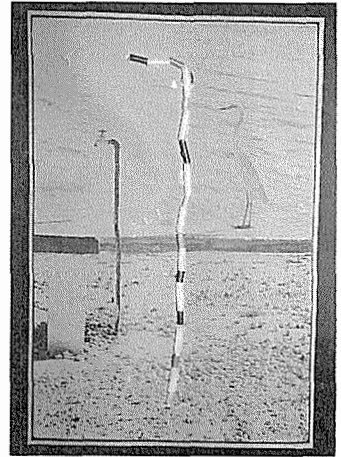


図-8 蝋燭をつなげたもの

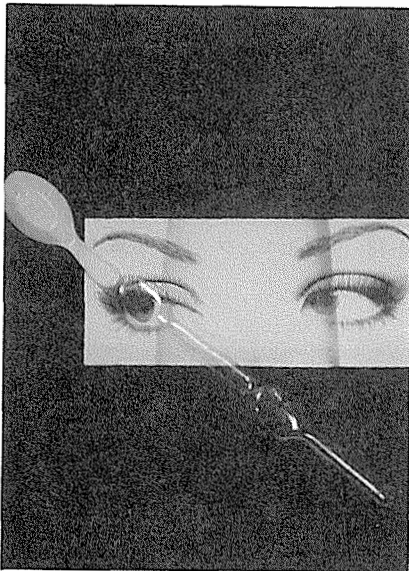


図-9 デザート用使い捨てスプーン

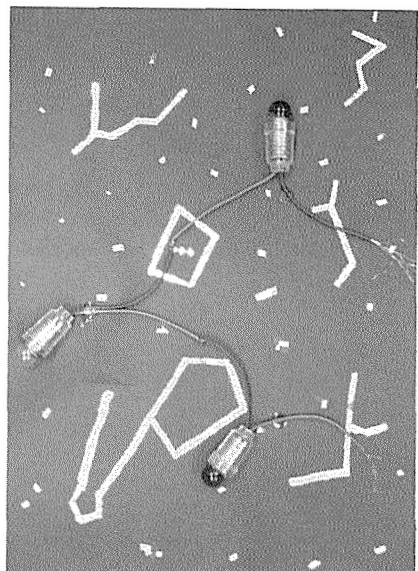


図-10 ソケット付豆電球

3. 同種素材（図-11～15）違う素材を用い、2枚一組で効果的に表現されている。

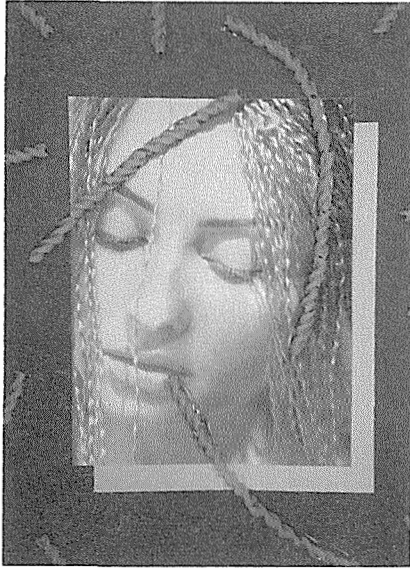


図-11 マカロニ、トウモロコシ

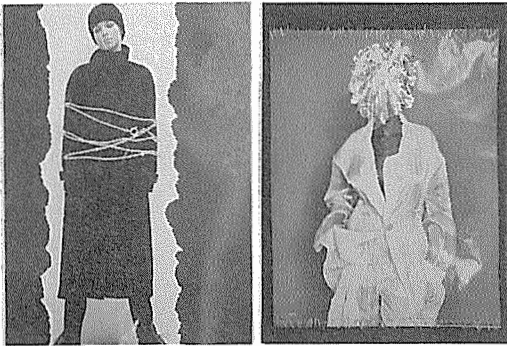


図-12 銀製ネックレス、ホチキス用マックス針

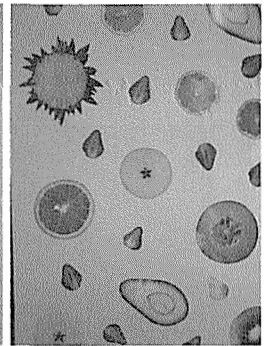
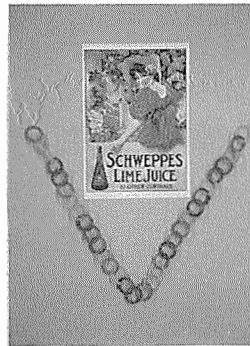


図-13 チェイニング、色々な果物輪切り写真

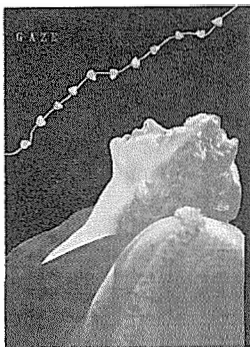
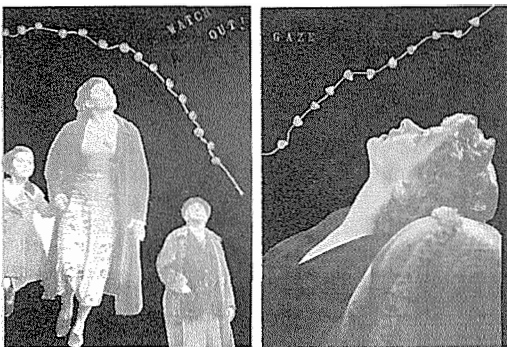


図-14 大豆、トウモロコシ

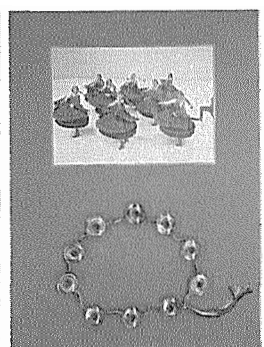
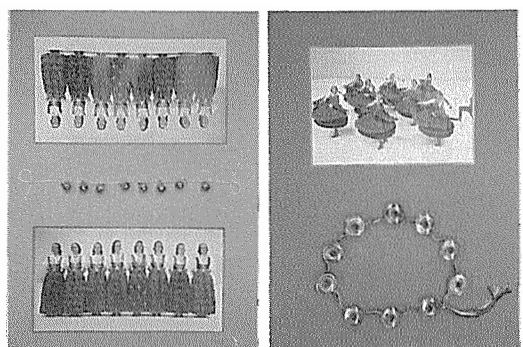


図-15 鈴、ポピン

4. 同素材のもの（図-16, 17）製作者は別である。創作糸に用いた素材は同じであるが表現方法が違い、比較するとその効果の違いが明確に理解できる。

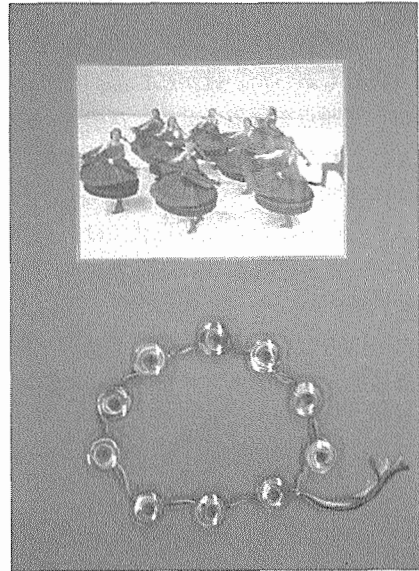
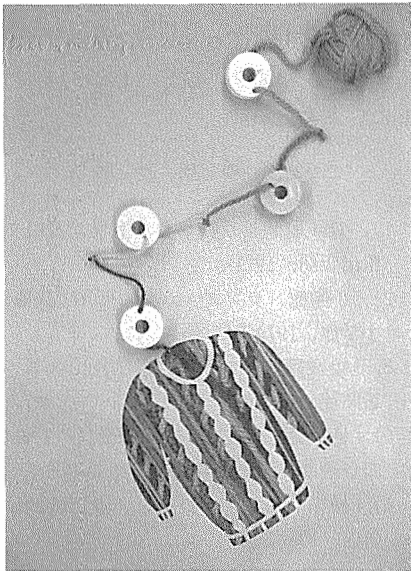


図-16 ポビン



図-17 マッチ

点を選びそれを1~4のパターンに分類した。図版はカラーでないため、色彩の効果に欠けるが、ここに選んだ作例は白、黒のコントラストのはっきりしたものをあえて使用した。(表-7)

・結果

課題1を提示した時点では、素材という意味の受けとり方が抽象的にしか捉えられていなかった。しかし20種類の創作糸を制作することにより素材は多種多様であり、見方を変えることでその表現もおのずと変わることが分かったよ

うである。素材に対する考え方もかなりの幅をもって理解できるようになったと思われる。また、素材を限定せず創作糸を制作したことによって、考え方に柔軟性が加わり、さらに学生同志のディスカッションによりその効果が上がったようである。

課題1で自由に考えた時にひらめいたイメージやディスカッション時の印象や、種々の雑誌写真、カタログなどから今までにないいろいろな現象を受けとめられるようになった。

V 結 語

物造りの授業は、創造力をのばすということがその根底にある。作品はこの創造力なくしてはできにくい。織物では、技術を教えることも重要な課題であるが現在、織物選択学生の卒業後の進路には織物関係は殆どなく、一般企業に就職するのが現状である。このような現状を踏まえて、どのような仕事にも、適応できる人材の必要性を考え、織物で何ができるかを考え、

創作糸の授業を採り入れた。

「このような授業が、織物を織ることに関係があるのだろうか。それよりも作品を一枚でも多く作らせた方が授業としては良いのではないか」という指摘もあった。確かに作品を織り、その作品から問題点を反省させて、次の作品に反映させる。これが理想と思うが、織物制作はその一工程に時間が掛かり、技術指導もそれなりに力を入れなければならない現状では、制作本来から学ばなければならない造形要素が、どうしてもおろそかにならざるを得ない。そのため限られた時間のなかで素材、色、デザインを同時に理解させ、造形的センスを身につけるには、創作糸は適当な演習であろうと思われる。

この創作糸による授業から、いくつかの利点をあげてみる。

- 1) 糸について 現在市販されている糸は織物用、編物用、機械製織、編成などに糸がそれぞれの条件をもち、適応されていることを理解し、実際に織物を織る場合も糸の選択に考慮するようになった。
- 2) 糸創りにより、身の回りの素材に興味を持つようになった。さらにその素材を通して常に事物の工夫を試みたいという意欲を見せるようになった。
- 3) 雑誌などを見る場合も今までは写された物をただ漠然と眺めていたようだが、レイアウト訓練の後には、写真のレイアウトやその効果、配色や素材まで興味を示すようになった。さらに、テキスタイル雑誌に見られるイメージマップを参考に見せた場合も、そのセンスの高さを理解できるようになった。
- 4) 織物をデザインする際、布地をデザインするだけでなくどのような目的で使うのか、なども含めて考えられるようになった。

以上のような観点から行った授業であるが、

教師の側からも、学生達の表現方法や、その考え方を聞くことによって、現代学生の興味や疑問点をも知ることができ有意義であった。このことを総合して、今後は織物制作全体についても、多角的に考え、技術と創造力の接点を模索したいと考える。

引用文献

- 1), 4) 「服装第百辞事典 上巻」被服文化協会文化出版局, 1971年
- 2) 「小学館 ランダムハウス英和大辞典 第4巻」小学館, 1974年
- 3) 「染織辞典」日本織物新聞社出版部 日本織物新聞社, 1931年
- 5) 「目で見える繊維の考古学(繊維遺物資料集成)」布目順郎 染織と生活社, 1992年
- 6) 「技術シリーズ 染・織」軍司敏博監修 朝倉書店, 1990年
- 7) 「ファッション産業人材育成用教材・テキスタイルシリーズ」テキストブック 1992年 テキスタイル・エンジニアリング [1] 一原料から糸へ 日本紡績協会編

参考文献

- 1) 「日本染織史」赤石國助 雄山閣, 1928年
- 2) 「日本染織辞典」上村六郎 辻合喜代太郎 辻村次郎 東京堂出版, 1982年
- 3) 「バウハウス 歴史と理念」利光功 美術出版社, 1988年
- 4) 「現代デザイン事典」勝井三雄 田中一光 向井周太郎 平凡社, 1994年
- 5) 「デザインの事典」廣田長治郎 朝倉書店 1988年
- 6) 「メディア時代の美術教育」柴田和豊 国土社, 1993年
- 7) 「プリントデザイン(捺染デザインの基礎から実用まで)」吉川正己 高岡弘 野末和志 文化出版局, 1986年
- 8) 「The Textile Disign Book」Karin Jers Torp Eva Kohlmark A&C Black Ltd, 1988